

# 達磨



菩提達磨

菩提達磨（ぼだいだるま、梵: बोधिधर्म, bodhidharma, ボーディダルマ）は、中国禅宗の開祖とされているインド人仏教僧である。達磨、達磨祖師、達磨大師ともいう。「ダルマ」というのは、サンスクリット語で「法」を表す言葉。達磨との表記もあるがいわゆる中国禅の典籍には達磨、古い写本は達摩と表記する。画像では、眼光鋭く髭を生やし耳輪を付けた姿で描かれているものが多い。

曇林が伝えるところによると、南インドのタミル系パッラヴァ朝において国王の第三王子として生まれ、中国で活躍した仏教の僧侶。5世紀後半から6世紀前半の人で、道宣の伝えるところによれば宋（南朝）の時代（遅くとも479年の齊（南朝）の成立以前）に中国にやって来たとされている。中国禅の開祖。『景德傳燈録』によれば釈迦から数えて28代目とされている。インドから中国南方へ渡海し、洛陽郊外の嵩山少林寺にて面壁を行う。確認されているだけで曇林、慧可の弟子がいる。彼の宗派は当初楞伽宗と呼ばれた。彼の事績、言行を記録した語録とされるものに『二入四行論』などがある。

## 1 生涯

「ダーマ」とも。菩提達磨についての伝説は多いが、その歴史的真實性には多く疑いを持たれている。南天竺国香至王の第三王子として生まれ、般若多羅の法を得て仏教の第二十八祖菩提達磨（ボーディダルマ）になったということになっているが、最も古い菩提達磨への言及は魏撫軍府司馬楊銜之撰『洛陽伽藍記』（547年）にあり、全ての達磨伝説はここに始まるともいわれている。

時に西域の沙門で菩提達磨という者有り、波斯（ペルシア）国の胡人也。起ちて荒裔（はるか）なる自（よ）り中土に來遊す

このころ西域の僧で菩提達磨という者がいた。ペルシア生まれの胡人であった。彼は遙かな夷狄の地を出て、わが中国へ來遊した。

〈永寧寺塔の〉金盤日に炫（かがや）き、光は雲表に照り、宝鐸の風を含みて天外に響出するを見て、歌を詠じて實に是れ神功なりと讚歎す。自ら年一百五十歳なりとて諸国を歴涉し、遍く周らざる摩（な）く、而して此の寺精麗にして閻浮所（諸仏の国）にも無い也、極物・境界にも亦（ま）た未だ有らざると云えり。此の口に南無と唱え、連日合掌す。

永寧寺の塔の金盤が太陽に輝き、その光が雲表を照らしているのを見て、また金の鈴が風を受けて鳴り、その響きが中天にも届くさまを見、思わず讚文を唱えて、まことに神業だと讚嘆した。その自ら言うところでは、齢は150歳で、もろもろの国を歴遊して、足の及ばない所はないが、この永寧寺の素晴らしさは閻浮にはまたと無いもの、たとえ仏国土を隈なく求めても見当たらないと言い、口に「南無」と唱えつつ、幾日も合掌し続けていた。（洛陽城内伽藍記卷第一（永寧寺の条））

また、『二入四行論』が達磨に関する最も古い語録で達磨伝説の原型であるとともに達磨の思想を

伝えるとされている。

普通元年（520年）、達磨は海を渡って中国へ布教に来る。9月21日（10月18日）、広州に上陸。当時中国は南北朝に分かれていて、南朝は梁が治めていた。

●『景德傳燈録』第三卷

帝問曰朕即位已來造寺寫經度僧不可勝紀有何功德  
師曰並無功德  
帝曰何以無功德  
師曰此但人天小果有漏之因如影隨形雖有非實  
帝曰如何是真功德  
答曰淨智妙圓體自空寂如是功德不以世求  
帝又問如何是聖諦第一義  
師曰廓然無聖  
帝曰對朕者誰  
師曰不識  
帝不領悟  
師知機不契

- この書では梁の武帝は仏教を厚く信仰しており、天竺から来た高僧を喜んで迎えた。武帝は達磨に質問をする。

帝問うて曰く「朕即位して已來、寺を造り、經を写し、僧（僧伽、教団）を度すこと、勝（あげ）て紀す可からず（数え切れないほどである）。何の功德有りや」  
師曰く「並びに功德無し」  
帝曰く「何を以て功德無しや」  
師曰く「此れ但だ人天（人間界・天上界）の小果にして有漏の因なり（煩惱の因を作っているだけだ）。影の形に随うが如く有と雖も實には非ず」  
帝曰く「如何が是れ真の功德なるや」  
答曰く「淨智は妙円にして、体自ずから空寂なり。是の如き功德は世を以て（この世界では）求まらず」  
帝又問う「如何が是れ聖諦の第一義なるや」  
師曰く「廓然（がらんとして）無聖なり」  
帝曰く「朕に対する者は誰ぞ」  
師曰く「識らず（認識できぬ…空だから）」  
帝、領悟せず。師、機の契（かな）はぬを知り

武帝は達磨の答を喜ばなかった。達磨は縁がなかったと思い、北魏に向かった。後に武帝は後悔し、人を使わして達磨を呼び戻そうとしたができなかった。

達磨は嵩山少林寺において壁に向かって9年坐禪を続けたとされているが、これは彼の壁觀を誤解してできた伝説であると言う説もある。壁觀は達

磨の宗旨の特徴をなしており、「壁となって観ること」即ち「壁のように動ぜぬ境地で真理を観ずる禪」のことである。これは後の確立した中国禪において、六祖慧能の言葉とされる坐禪の定義などに継承されている。

大通2年12月9日（529年1月4日）、神光という僧侶が自分の臂を切り取って\* [1] 決意を示し、入門を求めた。達磨は彼の入門を認め、名を慧可と改めた。この慧可が禪宗の第二祖である。以後、中国に禪宗が広まったとされる。\* [2]

永安元年10月5日（528年11月2日）に150歳で遷化したとされる\* [3]。一説には達磨の高名を羨んだ菩提流支と光統律師に毒殺されたともいう\* [4]。

その没後には道教の尸解に類した後日譚が伝わるが、中国の高僧伝にはしばしば見られるはなしである。それは当時、北魏の使者として西域からの帰途にあった宋雲がパミール高原で達磨に出会ったというものである。その時、達磨は一隻履、つまり草履を片方だけを手にしていたという。宋雲が「どこへ行かれるのか」と問うた所「西天へと行く」と答え、また「あなたの主君はすでにみまかっている」と伝えたというのである。帰朝した宋雲は、孝明帝の崩御を知る。孝荘帝が達磨の墓を掘らせると、棺の中には一隻履のみが残されていたという。

## 2 影響

達磨により中国に禪宗が伝えられ、それは六祖慧能にまで伝わったことになっている。さらに臨済宗、曹洞宗などの禪宗五家に分かれる。日本の宗教にも大きな影響を及ぼした。

禪宗では達磨を重要視し、「祖師」の言葉で達磨を表すこともある。禪宗で「祖師西來意」（そしていい：達磨大師が西から来た理由）と言えば、「仏法の根本の意味」ということである。

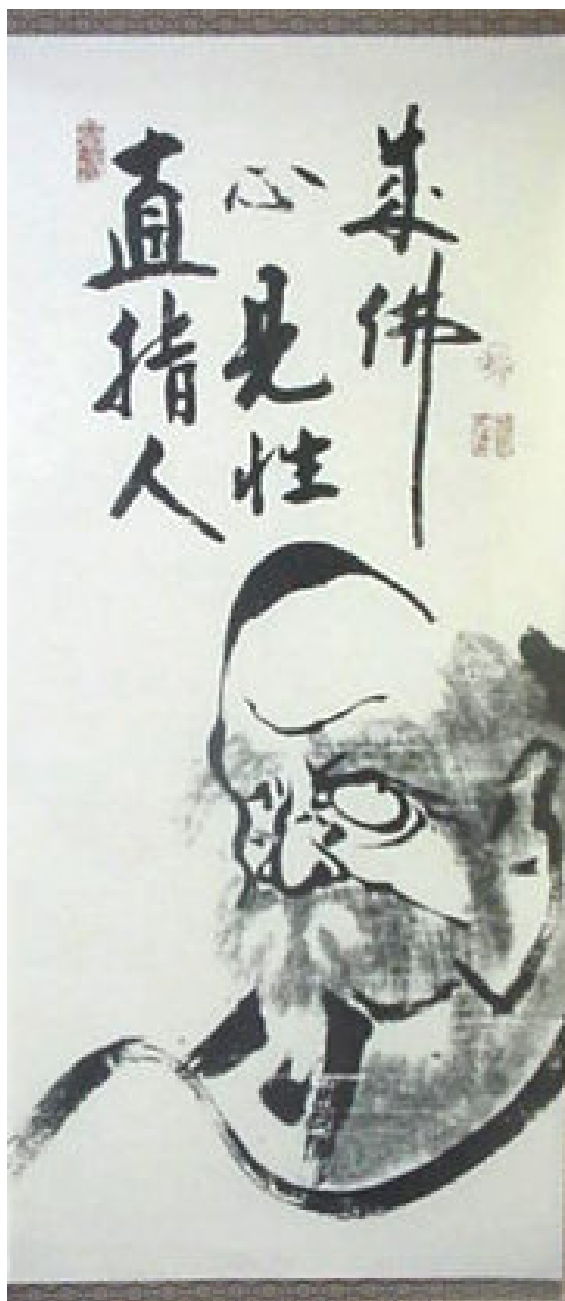
達磨が面壁九年の座禪によって手足が腐ってしまったという伝説が起り、玩具としてのだるまができた。これは縁起物として現在も親しまれている。

## 3 注・出典

[1] この伝説もまた、慧可と曇林が盗賊に臂を斬られたという唐高僧伝のエピソードからの潤色と水野弘元などは指摘する。

[2] 瑩山紹瑾『伝光録』第二十九章を参照。

[3] 大川普済『五灯会元』より（上記の伝光録の記述とは矛盾する）。成尋『参天台五台山記』によると太和19年（495年）10月5日入滅であるが、それより後年にも活動していた記述があり、信憑性にはやや問題がある。



白隠慧鶴 筆『達磨図』

[4] 道元『正法眼蔵』第二十五「溪声山色」、瑩山紹瑾『伝光録』第二十八章「菩提達磨章」を参照。

## 4 関連項目

- 聖徳太子
- 達磨寺
- 雪だるま
- だるま

## 5 関連図書

- 『達磨からだるまのしり大辞典』中村浩訳・著、社会評論社刊（2011年7月）、ISBN 978-4-7845-1903-3